

## 大和・奈良地域の観光に関する学術研究

本研究は2年目を終えたが、研究体制は初年度と同じで、歴史分野と、現状と将来展望分野の2分野およびスタッフに基本的な変更はなかったが、歴史分野の藤井教授が学長に就任したので、激務が予想されることから本研究のメンバーを離脱した。

まず歴史分野の調査・研究について略述する。歴史分野は絵図屋発行の名所記・案内図の研究を中心としながら、周辺の問題も合わせて研究対象としている。本年度の共同研究としては、絵図屋筒井家のご当主筒井正夫氏に御出席いただき、同志社女子大学の絵図屋資料研究家吉海直人助教授を講師に招き、絵図屋刊行資料の研究会を本学でおこなったこと、また絵図屋筒井家所蔵の資料をマイクロ撮影する作業を一応終了したことがあげられる。写真撮影した資料については、目録の作成・ネガ・陽画の整理などの作業が、3年目の課題である。以下各個別研究テーマ毎に研究の概要を略述する。

鎌田道隆：奈良絵図屋名所記案内図の研究

江戸時代の絵図屋刊行資料を内容から検討していくと、江戸後期には、大和一国または伊勢・大和廻絵図、大日本道中絵図など、奈良よりも広域の案内図・案内記を刊行しているが、幕末から明治・大正へかけては、奈良市街か特定地域を限定した出版へと向っている点に注目している。

永井一彰：大仏前絵図屋現蔵の江戸末期版木の研究

版木の入木に焦点を定めて研究した。筒井家所蔵版木のうち入木の認められた6点を研究して、江戸時代の入木技術について検討した。その特徴は文字を分割する型の入木が一般的に行なわれていること、入木部分の木の反りかえりを防ぐ技術が、この入木の技法のなかにあるのではないかという点が想定できることなどである。

森田憲司：奈良案内記の資料学的調査——奈良大学所蔵資料を中心に

奈良観光関係資料の調査のため、内閣文庫、国会図書館、東洋文庫、大阪府立中之島図書館などへ出張し、本学未収の江戸・明治期紀行等の複写・検討をおこなった。とくに、内閣文庫・中之島図書館で『廣大和名勝志』の稿本・校正浄写本に注目したが、さらに綿密な調査が必要であることが判明したので、次年度の課題の一つとなった。

西山要一：絵図屋現蔵の版木・銅版の保存科学的研究

版木の材質、銅版の材質、墨や顔料の種類、刷り技法、紙の種類などを科学的に分析するとともに、虫害・黴害・破損状況なども調査して保存処理と保存管理方法について検討するのが課題である。昨年度の版木200枚につづいて、本年度は残りの版木と銅版の合計50枚について調査した。版木・銅版の種類は肉眼観察では桜材と純銅に見えるが、採集サンプルの精密鑑定、銅版の元素分析は次年度に実施する。破損状況は、木版の場合虫害、黴害、折れや割れ、クギ

錆など何らかの破損が全点に及んでおり、銅版の錆は、黒っぽい塩基性炭酸銅の錆と緑青色の塩基性塩化銅の錆の2種類を確認した。またX線調査による墨書記載の判読作業などの一部も、次年度の調査課題となった。

三木理史：奈良絵図屋案内図の地理学的研究

絵図屋関係絵図資料の複写収集に重点をおいた。とくに国立国会図書館所蔵分についてはほぼ収集をおえた。収集したものは『奈良名勝便覧』『改正画入奈良名所記』『西国巡礼旅便利』『改正絵入南都名所記』『西国巡礼大和廻り道中細見増補指図記』などである。絵図屋現蔵のものとの詳細な比較研究が必要である。

上野 誠：歌枕の観光地化

本年は明日香を中心として『日本書紀』『万葉集』に関する資料整理を中心とした。折しも飛鳥苑池遺構の発掘見学ができたので、『万葉集』の島宮苑池との比較を試みた。こうした発掘の成果と古代資料の収集を進めていくと、古代を実感する観光という観点から意義深いものがあると痛感した。さらに明日香村の観月会などの行事にも関係したが、住民参加の生涯学習的要素があり、観光開発の視点として重要だと確信した。

以上歴史分野においては、各人の研究テーマを深めながら、絵図屋資料と周辺の研究から、大和・奈良地域の観光の歴史についての学際的な共同研究の内実が徐々に深められつつあるといえることができる。

現状と将来展望の分野では、最初の研究テーマ設定と研究組織の組み立て方に問題があったので、共同研究としての内実を本年度もあげえなかったといえる。以下、各研究テーマ毎に一年間の活動報告をするかたちをとりたい。

高橋春成：観光資源としての奈良公園のシカ

544人の国内の人にアンケートを実施し、奈良公園のシカに関する認識について検討した。このアンケートからの問題点は、シカの由来や歴史および交通事故・過密度・シカせんべい問題などがほとんど理解されていないこと、シカの人馴れと野生が別居できるシステムづくりの欠如などが判明した。また外国人140人に対するアンケートでは、奈良といえばシカのイメージは定着しているが、欧米一般の野生シカの通念で奈良のシカを評価している。以上のことから、奈良のシカの正確な情報が訪問者に理解されるような施設やシステムの構築が必要である。

実 清隆：国際観光都市奈良の景観変容とまちづくりに関する研究

奈良町の変容変容についての現地調査と住民へのヒアリング、生活様式の変化に関するアンケート調査も実施した。奈良町は江戸時代以降の伝統的な街並み景観が、近年では小家族化、高齢化がすすんで、古い住宅がマンションやガレージに転身する一方、地域住民による祭りの復活や博物館施設の充実などもみられる。

芹澤知広：大和奈良地域における外国人観光客受入れの現状についての研究

奈良県における外国人観光客の受け入れについて、代表的な6つの機関について、実態を調べた。(1)奈良県企画部文化観光課 (2)近畿運輸局企画部観光課 (3)近畿日本鉄道 (4)奈良交通

バス (5)ならシルクロード博記念国際交流財団国際交流課 (6)奈良コンベンションビューロー。これらはいずれも外国人観光客の受入れにかかわっているが、それぞれ独自に事業をすすめているのが現状である。

金尾平三：奈良県下におけるグリーンツーリズムの可能性

平成11年度の調査研究として、鹿児島県下におけるユニークな村づくりを見学してきた。京都府の美山町のかやぶき民家と自然を生かした観光のあり方、また奈良県明日香村の多くの文化財と人間生活の共生など注目される。

中川寿夫・横田浩：奈良地域の観光事業（行政と産業）－環境問題の視点から－「奈良市民および観光客の意識調査 V. S. 現状」の比較分析

本年度に予定していた観光客を対象とする調査は、時間の関係で断念したが、環境情報科学センター（東京都千代田区）と国立環境研究所（茨城県つくば市）への訪問による資料収集や、気候ネットワークへの加入による情報源の確保、そして京都での地球温暖化問題のシンポジウムへの参加をした。

大村喬一・堤 博美・東山弘子：奈良美食考

古都奈良に住む者として、古代飛鳥の食を体験するため、飛鳥保存財団の「万葉あすか葉盛御膳」の会に参加した。さらに奈良パークホテルの「天平の宴」と題する古代ヘルシー料理の食味体験にも参加した。

確井照子：GIS（地理情報システム）を利用した観光データベース開発と研究成果プレゼンテーションシステムの開発

電子地図をベースに行政地名や集落地名から、奈良県に関する文学・史学・地理学などのデータを検索する地名検索システムを作成した。ベースマップの範囲は奈良県全域であるが、文化財遺産の集中した奈良盆地に関しては、神社および寺に関するデータベースも利用した。

浅田 隆：奈良近現代文学遺跡と観光政策

昨年度の研究につづいて、(1)奈良にかかわる作品については県下を北倭・中倭・南倭に分けそれをさらに東西に区分して6つのゾーンに分類して作家・作品のリストを作成しつつある。(2)作品に描かれた場所については、社寺・遺跡を明示し、情緒空間の抽出にも留意した。(3)場所の描かれ方や(4)作品の地域別整理は進行中だが、不十分であった。(5)場所の探訪と写真撮影は、御所や斑鳩地域にも範囲を広げた。(6)写真の整理は12年度の課題となった。

（文責：特別研究代表者 鎌田道隆）